

瀬名秀明論

和田 勉

一

日本近代文学と分子生物学との関わりという視座から、瀬名秀明について論じたい。最近の遺伝子の分野をはじめとする分子生物学の著しい成果を、文学を見る場合に援用できないだろうか。分子生物学が進展し、遺伝子の研究が精密化され、生命体、生命現象についての分析が緻密になった科学の現状によって、現代の文明は大きく揺り動かされている。科学が現実世界の境域を広げ、人間の生を直接に動かす事態は、予想を上回る速度で広がっており、従来の人間観を根底から揺さぶるほどになっている。

文学が、人間とは何か、人生とは何かを描くものであると

すれば、分子生物学の視点から捉え直すことも可能だろう。いや、むしろ、人文学においても、このような現代の科学的な知見を取り入れないわけにはいかなくなっているとさえ言える。遺伝子は、あらゆる生き物の中核にあつて、生命現象の源泉になっている。この世に生きるということはいかなることか——遺伝子の実態を知ることによって、生物を包容した大自然、そしてそこに存在する人間のありさまを、もう一つ別の視点から捉え直すことができるのではなからうか。

そのため、瀬名の作品の中では、遺伝子のことを扱った『パラサイト・イヴ』（平7、角川書店）や「Gene」（平8、角川書店、『絆』所収）を主に採りあげることになる。遺伝子を中心とした分子生物学の視点を導入することで、瀬名において、人間や文学を捉える視点がどのように独自のものとなりえているかを明らかにしたい。文学と科学——一見、無関係と思われる領域ではあるが、現代社会を捉える上で、むしろ重要な組み合わせであるだろう。特に、瀬名秀明という作家を論ずる上では、効果的であると言える。もつとも、このような方法の有効性と妥当性を最終的に保証するのは、作品に対する緻密な読みと、正確な論証以外にはありえない。

分子生物学を援用することは、基本的には、厳密な合理性や科学的な実証によって解析できない人間の精神や人間存在

の深層に測鉛をおろすために、むしろ有効な方法であると言える。文学的な研究方法だけでは容易に辿りつけない新しい視座を採り入れることによって、文学それ自体が本来もっている多様性を明瞭に示すことにもなるはずである。ただし、文学研究の立場で論ずる限り、作品の多義性の一側面を照らし出すことで、より豊かな読みに結びつけるための援用でなければならぬだろう。

木下清一郎は『心は遺伝子をこえるか』（平8、東京大学出版会）の中で、「心があつてはじめて、科学も、文学も、芸術も、ありとあらゆる文化が生じてくることを思えば、心の特異性とその貴重さをあらためて感じさせられる。人は心というものをもっとだいにしなくてはなるまい。それは心をもっている私たち自身が背負っている運命と責任である。（中略）心をとときあかすには、自然科学と人文学をもに包括する新しい学問が、あらわれてこなければならぬのであろう」と述べている。また、中村桂子は『生命科学から生命誌へ』（平3、小学館）の中で、「ヒトっていったいどんな生きものなのという問いへの答の一つとしてDNAから攻めてみるのは効果的で興味ある方法だと思います」と述べている。本稿の意図は、これらの分子生物学者の主張に通うことを、近代文学を通して行うという試みである。

瀬名秀明は『小説と科学——文理を超えて創造する』（平11、岩波書店）の中で、『パラサイト・イヴ』のテーマは『共生』です。私たちは多くの人や社会や環境と共生しています。また私たちの体も数多くの細胞から成り立っています。普段は気がつかなくても、そういった共生関係が崩れると恐ろしい事態が引き起こされる。その危険性を描こうとしました。そのためにミトコンドリアと細胞の共生関係だけでなく細胞と個体、あるいは臓器と個体の関係、さらには親子や夫婦など人間と人間のつながり、共生関係を物語の中心に据えることによって力強さを出そうとしました」と述べている。共生関係の中でも、ミトコンドリアとヒトの共生や、亡くなった聖美の腎臓と臓器移植された麻理子の共生が顕著に描き出されている。ミトコンドリアと宿主細胞との共生も、石原教授の講演の中で語られたりするが、それ程説得的なものではないのは、実感しにくいことにも拠るだろう。

また、瀬名は『パラサイト・イヴ』では研究者の日常を事細かに、リアルに描くことによって、逆に気味悪さを出そうとしたのです。しかし、最初からミトコンドリアを使おうと考えていたわけではありません。はじめの構想では、単に細胞がぶよぶよと増えてきて怪物になって襲ってくる小説になるはずでした。ところがその時期にNHKスペシャルの『生

命』を見て、細胞とミトコンドリアが共生しているというリ
ン・マーグリスの細胞内共生説が紹介されていて『なるほど、
これは使える!』と思ったのです。私は以前からその説を知
っていました。自分の研究分野と直接関係がないというこ
とであまり勉強していませんでした。でも番組で共生の様子
をきれいなCGで再現していたので心が惹かれたのです。さ
っそくプロットを作り直し、いまの形にしたというわけです」
とも述べている。理系の「研究者の日常を事細かに、リアル
に描」いているのは、ミトコンドリアという特異な素材を扱
いながらも、作品にリアリティをもたせるために作者がとつ
た一つの手段とも言えるだろう。

二

『パラサイト・イヴ』に即して緻密に分析したい。

主人公の利明について、「中学、高校と進むにつれ、利明は
生き物がDNAというものによって制御されていることを知
った。その構造があまりにも完璧なことに、利明は純粋な驚
きを感じた。なぜ生命はこんなにもきれいに遺伝暗号を設計
することができたのか、そしてなぜこんなにも多様な生命の
変種をそれほどまでに単純な構造で表現することができたの

か、不思議でならなかった」とある。^{注3}このような意識をもつ
た主人公、あるいは作者の眼に映った新たな現実を、小説と
して更に掘り下げて描いてほしかった。^{注4}主人公の利明は、亡
くなった妻の聖美の腎臓の臓器提供をする一方で、聖美の肝
臓の継代培養をするという異常な行動に出るというストーリ
ーの展開ではあるが、主人公の感性自体は常識的である。た
だし、主人公が生化学者であるので、細胞や内臓への執着が
強い。また、人間を人格的な存在として捉えるのではなく、
無数の細胞から成り立ち、その細胞も種々の物質から出来て
いるというように唯物論的に捉えている。更に、人間を扱う
時に、生物としてのヒトの男や女として捉えているところも
あり、ヒトの身体に重点を置いて描き出している。

『BRAINVALLEY』（平9、角川書店）でも、「人
間の精神活動はすべて脳のニューロンの働きで説明される。
喜怒哀楽、記憶と情動、意識や思考、それらは分子によって
引き起こされる化学反応である——。少なくとも孝岡はそう
思っていた。いや、おそらく医学に携わるほとんどの人が同
じ考えだろう。物質還元主義的な立場から人間の営みを捕ら
えているはずだ。その感覚が全身に滲み付いてしまっている」
とある。脳の活動を化学反応として捉えるところには、F・
クリックの『DNAに魂はあるか——驚異の仮説』（平7、講

談社)などの影響が見られるが、作品としては、このような意識を持った者の感性や感覚として具体的に描いてほしいという思いがある。ストーリーテラーとしての才能を發揮することよりも、新たな感性や感覚をもった人間像として描き出していくことの方が、普遍性を獲得すると言えるだろう。

瀬名は、「実験と小説のあいだで」(矢内裕幸編『怖いもんなし23人の喋るぞ!』平11、旺文社)の中で、「従来の文学作品は、人間を、心の襞や論理では説明のつかないモヤモヤしたものを抱えた存在として描いてきました。一方、私は、『人間がある考えを持つ時には、人間の内部でこのようなことが起こっているのだよ』というふうに、人間を物質レベルで論理的に捉えようとしています。私の小説は、生物学的な人間観と文学的な人間観とを融合させて、新しい感覚を生み出すことを目指しています」と述べている。瀬名にとって、「人間を、心の襞や論理では説明のつかないモヤモヤしたものを抱えた存在として描くのは不得手であるとも言え、それは『パラサイト・イヴ』第二部の七章の利明の夢の描写などに顕著に窺える。一方で、ミトコンドリアや遺伝子や脳などを通して、人間の内部の活動が精密に展開されるところに、瀬名の作家としての特質がある。ただし、『パラサイト・イヴ』では、聖美の内臓を継代培養する利明は、聖美の細胞が生きていると

思ったりするが、それは、利明の妄想ともとれるようなもので、利明の新たな認識と言えるようなものではない。更に言えば、例えば、利明と聖美の恋愛をはじめ、ヒトとヒトとの心理のからくりについても、「物質レベルで論理的に捉え」というような試みがあってもよかつたのではないか。

作家とは、独自の視座からものを異化し、明視する営みを、虚構という言語世界を構築して具象化していく創造主体である。更に言えば、虚構における語り手は、作家の視座から派遣された分身的視点である。ポストモダンの現代では、もはや小説との関わりにおいて無邪気であることは難しく、〈語り手〉や〈視点〉といった小説の戦略と自覚的に関わることが求められよう。小説の技法としての語り手の設定の仕方などに、瀬名は自覚的であつてよいし、意図的、戦略的であつてよいだろう。

『パラサイト・イヴ』では、描写の文章ではなく、説明の文章も散見する。また、物語世界のあらゆる時間・空間に起こった出来事やあらゆる登場人物の内面を記述することが為されている。客観的な視点から、一見、すべての登場人物の心理をいともたやすく描いているような反面、結局、どの人物も常識的に平板にしか描ききれていないということになりかねない。そのため、登場人物が生身の人間像としては物足り

なく、あくまで物語を展開するための操り人形のようなところもある。

瀬名は、『神』に迫るサイエンス——BRAINVALL EY研究序説』（平10、角川書店）の中で『パラサイト・イヴ』について、「ウソの部分だけを取り出せば、あたかもその物語は科学を否定するかのように見える。だが私は決して科学を貶めようとしたのではなかった。むしろエンターテイメントという乗り物にのせて、読者に科学の面白さを伝えたいと思っていた」と述べている。目に見えないミトコンドリアの恐ろしさを伝えるのであれば、目に見えない恐怖として描いた方が効果的だったのではないか。例えば、麻理子に移植された腎臓についても、「海老のようにびちびちと踊っていたのだ。麻理子の体はそれに翻弄されていた。麻理子が自らの意志で動いているのではない。あまりにも動きが不自然だった」というように劇画的に表している。映像的な効果は確かにある。だが、目に見えないまま、気がついたらウイルスに征服されていたとした方が、目に見えないものを持つ本当の恐さは伝わっただろうし、人間のウイルスに抱く恐怖とも通底するだろう。

また、「実験と小説のあいだで」の中でも、瀬名は「現在までの科学の到達点から着想をするのです。つまり、基本的に

は現時点での科学の成果を意識しながらも、『今の技術ではここまでではできないけれども、できたら楽しいだろうな』という観点から書くのです。ですから、私の小説にはフィクションも多分に含まれることとなります。『パラサイト・イヴ』には、ミトコンドリアが怪物になってしまいうシーンがあります。が、あれなどは完全に創作です。そのシーンに至るまでの経緯は科学の話を踏まえて書いていますが、その結論は非科学的ですから、当然反対意見が起きます。でも、それこそがまさに、私が望んでいるところなのです」と述べている。後半では、ヒト中心の世界からミトコンドリア中心の世界への進化の過渡期の混沌とした姿を描くために、両者の生殖によるつながりが、過剰なまでに描き出される。だが、作品全体の統一という視点から見た場合、前半の現実的な展開の仕方と、後半のあまりにも空想的なストーリーの展開の仕方では、落差がありすぎるといっても否定しようがあるまい。後半では、人間達よりも、むしろ変身したミトコンドリアの方が主人公であることが明らかになる。そのところの小説としての展開の仕方が難しいことは納得できるが、空想として描くにしても、可能な限り事実を踏まえたフィクションとした方が、前半とのつながりもよかったと言える。

「エピソード」の中の、「人間がミトコンドリアについて知

っていることはあまりにも少ない。まだミトコンドリアの研究はようやくその入り口に立ったところなのだ」ということが実状であるにしても、『パラサイト・イヴ』のように科学的な題材を扱っている場合、可能な限り、事実を踏まえて想像力を働かせる方が有効であろう。それは、同じ科学者の鷗外が「歴史其儘と歴史離れ」で記したような立場につながるはずである。つまり、史料を十分に尊重して「猥みだりに変更することなく、そこに生きた感情を通わせるならば、小説はおのずから事実の堅固さをもつて自立し、十分なりアリティを獲得することになる。また、史料に記載されていない部分を空想を交えて小説に描く場合にも、史料の「自然」を尊重しながら、歴史家が推理するのと違わないほど調査を踏まえて想像力を働かせるというような立場である。

『パラサイト・イヴ』の後半には、「そろそろ行動に移すときがきた、と彼女は思った。宿主に対する従順な奴隷であることを放棄するときだった。すでに昨夜の試みでもわかったように、宿主の主要な神経伝達を思うままに操る準備は整っていた。彼女が考え、聖美の肉体がそれに従う。快い主従関係だ」とある。ここでは、ミトコンドリアと聖美との主従関係ということであるが、これは視点を換えれば、遺伝子とヒトと言うことでもある。また、聖美にも同様の発言をさせて

おり、石原教授にも、「ミトコンドリアはわれわれの先祖である細胞に寄生した当初は、自分の遺伝子に自分を増殖させる遺伝暗号を持っていたはずです。しかしミトコンドリアはすぐにそういった暗号を、宿主の核遺伝子に組み込んでしまったのです。そしていま、ミトコンドリアの中にあるDNAにはほんの少しの遺伝暗号しか残っていません。ミトコンドリアは自分の体を増殖させたり、自分の体を構成するタンパク質をつくることを、全部核に押し付けてしまったのです」と語らせている。更に、石原教授によつて、ミトコンドリア遺伝子が母系遺伝することが説明され、そのことが、この物語の結末につながっていくことになる。ただし、この辺りは、登場人物の講演というような体裁をとってはいるが、生化学の解説文のようになってしまっている。作品全体として見ても、石原教授には、生化学の解説をする役割が付与されていて、それ以外の人間味は乏しいと言える。この作品のほとんどの登場人物は、単一の個性として描かれているので分かり易くはあるが、二つの側面の葛藤とか、多様な側面を描き出すというようなことはそれ程為されていない。

ところで、ミトコンドリアが、聖美という存在にのりうつることになった原因は何なのか。ミトコンドリアの研究者である利明の妻であったからということの他には、はっきりし

たことは分からず、客観的な語り手である浅倉の追想の中には、「聖美の遺伝子がたまたまミトコンドリアの暴走を招くようなものだったということなのか？」とある。ミトコンドリアが不意に聖美の体内に進入したのは、偶然が作用したということなのだろうが、その必然性を、聖美の人物像と共に描き出していけば、更に凄みがあつただろう。聖美の幸せな少女時代や学生時代が描かれる中に、予兆のような形ででも、その後の聖美とつながるような要素が描き出されていけば、説得力があつたと言えよう。作者としては、幸せな聖美とミトコンドリアに征服された聖美の「ギャップを出したかった」^{ま。}のであろうが、例えば、何らかの原因で聖美の体力が衰え、病原体の力の方が上回り、病気が発症するというようなことであれば、医学的にも証明されるだろう。ミトコンドリアに操られて、自分が無意識のうち何をして仕出かすか分からぬ人間だと思ふことは、自分の存在そのものに対する恐れを抱かせずには置かないであろうし、何ものかの力が人間を操り動かして心にもない行動に走らせるのだと思えば、人間の無力さが痛感されずにはいけないことになろう。「自覚のないうちに自分が何かしているのではないかと考えてしまい、全てに対して臆病になった」とあるものの、聖美の不安や怯えそのものは掘り下げて描き出されているわけではない。聖美は、病

弱な麻理子とは違って、ヒロインとして美化された人物像であり、リアリズムよりもロマンチズムによって描き出されている。「人間を物質レベルで論理的に捉えよう」とすることに徹するのであれば、二重人格に苦しむ聖美の人間像を更に精細に描ききってほしかった。また、ミトコンドリアが利明をおびき寄せるために、浅倉に取り憑き、聖美の声で話す第三部の三章のところなど、あまりにも自在に展開しすぎる。聖美と浅倉が、どちらもミトコンドリアに寄生されてしまうことで、ミトコンドリアの凄さを表そうとしたのであろうが、二人のつながりの設定の仕方において、必然性に欠ける面もある。また、後半のミトコンドリアの超能力を、もしかしたらあり得べきこととして不自然でなく描ききっていけば、更に説得力があつただろう。

なお、作者は聖美より「浅倉佐知子の方が好き」^キであり、「彼女は僕にとって理想的な女子学生像」であると述べている。浅倉は、美化された聖美とは違って等身大の人物像ではあるが、それ程魅力ある人物として描かれているわけではない。

『パラサイト・イヴ』では、章毎の場面展開は巧みであり、同時進行する時間や過去の時間を作品の中に見事に織り込んでいる。このような時間の設定やそれに伴う映像的な効果は、

作者の自覚的な手法に基づくものと思われる。このような立体的な時間構造が、作品に奥行きを与え、厚みのある文学空間を造り出す力になっていることは見逃せない。

文体については、叙情を排した科学者の文章となっており、人生上の出来事が無機的に情報として描く傾向が見られる。唯一つの意味の伝達を目的とするように配慮された、科学的な言説であると言える。ただし、表題にも用いられた「イヴ」については、約二十万年前にアフリカにいた人類の最初の女性であるという意味と、聖美の誕生日がクリスマス・イヴであり、祝祭日の前夜であるという意味が重ねられている。表題に即して言えば、ミトコンドリアが解放される前夜であり、ミトコンドリアの時代を産み出す最初の細胞ということである。

なお、『パラサイト・イヴ』では、同じ語句を繰り返し記述することで、言葉による強いインパクトを読者に与えようとしているところが目につく。特にミトコンドリア・イヴが麻理子の病室にやって来た時の描写などで用いられているが、必ずしも効果的とは言えない。繰り返しによる視覚的な強さはあっても、冗長な面を拭えないからである。また、作品全体を通して、擬声語や擬態語を用いてリアリティを出しているが、多用しすぎるとも言える。登場人物の心理を掘り下げ

て丹念に描くなど、臨場感を出す方法は、他にもあっただろう。

次に「Gene」について見ていく。「Gene」でも遺伝子が扱われているが、短編でもあるので、簡単に触れたい。「Gene」では、ヒトゲノム解析計画についての知識を踏まえて、パソコンのゲームを謎解きする体裁で話が展開する。この作品でも、「現実はそのDNAからRNAが転写されてリボソームでアミノ酸が繋がっていくところを見たことがありませんか？」というように、目に見えない世界を扱うこと不安や妄想が根底にある。主人公映子の特質は、現実の恋愛よりもコンピューターのヒトゲノム解析計画のゲームにのめり込むところにある。新たな生物について、遺伝子の配列さえあれば発現できるという友人河村の考えを否定できない。「生物とは、はじめに遺伝子の配列ありき」と言われ、「存在しないものの遺伝子を解析し、その結果を用いて現実の世界で発現させる」ことの不安に陥る。ただ、作品に描かれた「Gene」というゲームが、「現実のゲノム解析に似すぎている」としても、小説「Gene」では、あくまで映子が行ったコンピューターの中での話が主なので、小説としてのインパクトが弱いことも否定できまい。

「Gene」の巻末の参考文献にある金久實「ゲノム情報へ

の招待』（平8、共立出版）の中に記された「ゲノムプロジェクトの進展とともに、バクテリアから高等生物まで各生物種の全遺伝子と遺伝子産物（タンパク質、RNA）のカタログがつくり出されつつある」というのが生化学の現状であるにしても、「Gene」に文学作品としての物足りなさは残るだろう。遺伝子とコンピュータを小説の中に取り込むという実験的な試みは評価できても、登場人物の各自の形象が思い付きの域を出ていないと思われるからである。

三

瀬名は、『パラサイト・イヴ』を記すに当たって参考にした主要な文献について、その巻末に記している。それらが、どのように摂取されているか、次に見ていくことにする。まず、竹内久美子の二冊の著書について見ていく。

竹内の『小さな悪魔の背中の窪み——血液型・病氣・恋愛の真実——』（平6、新潮社）には、カッコウの托卵（パラサイト）について記した後、「ウイルスや細菌（バクテリア）、寄生虫などの病原体（寄生者）は、人間や他の動物の体を利用し、自らの遺伝子のコピーを増やそうとする。いわば病原体は托卵鳥、あるいはそれらの卵やヒナのようなものである。一方、人間や他の動物は托卵

される宿主である（実際、我々や他の動物は病原体にとっての宿主という呼ばれ方をする）」とある。また、クジャクのオスの尾羽の美しさについての説の中で、「オスの持つ、生存力についての良い遺伝子を、メスが尾羽を手掛りに選んでいると仮定する。ただ、その良い遺伝子とは、寄生者（寄生者、ウイルス、寄生虫など。要するに病原体）に対する免疫的抵抗力についてのものである。寄生者にひどくやられていたら、美しい羽や大きな羽を持つことは難しい。尾羽の立派なオスを選んでいれば、自ずと寄生者に強い（即ち生存力の高い）オスを選ぶことになるだろうということである」と記されており、これらは『パラサイト・イヴ』を書く上で参考になっていると見ていい。この他にも、『小さな悪魔の背中の窪み』には、「パラサイト」という語句が何度も用いられている。例えば、「寄生者に強そうな男には、当然のことながら女の人氣が集中する。社会全体としては一夫多妻の傾向が強まるだろう。高温多湿の熱帯地方では寄生者からの脅威が著しい。そのような地域に極端な一夫多妻制が存在するのは、こういう理由によるのではないだろうか」というように使われており、ここから『パラサイト・イヴ』への応用は容易であると思われる。

『小さな悪魔の背中の窪み』の中には、「一九世紀末にある

人が、ミトコンドリアが形といい、大きさといひバクテリアにそっくりであることを指摘した。一步踏み込んで彼は、ミトコンドリアがバクテリアに由来するのではないか、とまで言った。二〇世紀に入るとまた別の人が、ミトコンドリアはバクテリアが細胞に共生した結果ではないかという仮説を提出した。(中略)一九五〇年代から六〇年代になると、分子生物学の発展や電子顕微鏡の発達のおかげでいろいろなことがわかってきた。ミトコンドリアの中に何とDNAが存在するのである。これは核のものとは全く別物で、しかもミトコンドリアは自前の合成系でタンパク質を作っているのだ。共生説は俄然活気づくこととなった。今度は確たる証拠があるのである。ミトコンドリアは元来独立したバクテリアだったのだろう。それが何らかの一つの細胞に共生し、今日に至ったのだ。だからこそDNAを持つているのである」ともある。

「ミトコンドリア」との「共生」という『パラサイト・イヴ』のキーワードが、ここに示されている。

瀬名が挙げる竹内のもう一冊の本である『そんなバカな！ 遺伝子と神について』(平3、文藝春秋)の中には、ドーキンスの説として、吸虫の利己的遺伝子がカタツムリの行動を操作する例が記されている。このことが、ミトコンドリアの利己的遺伝子がヒトの行動を操作する例として、『パラサイト・

イヴ』の内容にも影響を与えた可能性は高い。それは、竹内の『そんなバカな！ 遺伝子と神について』と、『パラサイト・イヴ』の「エピローグ」にも記されたドーキンスの『利己的な遺伝子』(平3訳、紀伊国屋書店)の両方の影響が相俟っているであろう。また、『そんなバカな！ 遺伝子と神について』の中の「ドーキンスはシロアリの社会進化の原因として、共生微生物操作説」を提出している。腸内の共生微生物がシロアリを操り続けた結果、とうとう社会構造にまで介入するに及んだと言うのである」という辺りも、『パラサイト・イヴ』を創作する上でヒントになっていよう。

『そんなバカな！ 遺伝子と神について』の中に記された「ドーキンス流に言えば、人間は神というミームを初めて乗せた乗り物ウィークルなのである。これは逆に、遺伝子は人間においてとうとう神という概念をつくるまでに至ったと言うことができるかもしれない」というところは、『パラサイト・イヴ』において、ミトコンドリア遺伝子が、ヒトの進化をほめたたえるところに類似している。つまり、「宿主は進化していった。単細胞であることを止め、多細胞生物の道を選択した。個々の細胞の役割を分担させることで、効率的に運動し、餌をより多く摂取するようになった。餌を捕るためには素早い神経伝達が必要となる。宿主はやがて陸に上がり、知性を獲得し、文

明を築くようになった。すべては自分たちの力だけで進化してきたと考えている。なんと単純なゲノムなのだろう、彼女は心の中で失笑した」という辺りである。ここには、「彼女」（ミトコンドリア）を視点とし、ミトコンドリアを中心に考えることで、ヒトを風刺することがなされている。ミトコンドリアが、人間を見下し、嘲笑する立場に身を置いているという設定である。

なお、利明が聖美の中のミトコンドリアの仕業に気づく場面に、「利明はいつか読んだ論文を思い出していた。『囚人のジレンマ』というゲームがある。（中略）ミトコンドリアはこれでゲームを終わらせるつもりなのだ。もう核ゲノムとは共生しない、そう決意したのだ。だからミトコンドリアは『裏切り』のカードを目の前に突き付けてきた」とある。「いつか読んだ論文」というのは、『パラサイト・イヴ』の巻末の参考文献には記されていないが、ドーキンスの『利己的な遺伝子』と竹内の『賭博と国家と男と女』（平4、日本経済新聞社）であると思われる。「囚人のジレンマ」について、『利己的な遺伝子』では、主に「気のいい奴が一番になる」の章に、『賭博と国家と男と女』では、「人の器は何で決まるか」の章に詳細に説明されている。『パラサイト・イヴ』では、「囚人のジレンマ」が、ミトコンドリアからの裏切りという例えで用いら

れている。利明がミトコンドリアとの争いをゲーム感覚で捉えているところに物足りなさも残るが、『パラサイト・イヴ』には、「囚人のジレンマ」の「やられたらやり返す」というような駆け引きが描かれているわけでもない。

ドーキンスの『利己的な遺伝子』には、「遺伝子は交叉によっても破壊されない。ただパートナーを変えて進むだけである。もちろん彼らは進み続ける。それが彼らの務めなのだ。彼らは自己複製子であり、われわれは彼らの生存機械なのである。われわれは目的に仕えたあげく、すてられる。だが、遺伝子は地質学的時間を生きる居住者である。遺伝子は永遠なのだ」とあり、遺伝子是不死身のまま生き続けていることが述べられている。また、「われわれの細胞一つ一つの中には、ミトコンドリアと呼ばれる小さな粒がたくさん入っている。ミトコンドリアは、われわれが必要とするエネルギーのほとんどを生産する化学工場であり、もしミトコンドリアを失えば、われわれは即死してしまうに違いない。ところが最近、このミトコンドリアは、その起源をたどると、進化のずっと初期のころにわれわれの祖先型の細胞と連合した、共生バクテリアだったのだ、という議論が説得的に展開されているのである」とも記されている。『パラサイト・イヴ』の巻末の参考文献に記されたNHK取材班編『生命 40億年はるかな

『旅』（平6、日本放送出版協会）の中にも、ドーキンスの『利己的な遺伝子』と同様の内容、つまりミトコンドリアと細胞との共生、及びそれに至る経緯が記されている。『パラサイト・イヴ』では、エネルギーを産み出す役割だけを行って従属的存在であったミトコンドリアが、利己的遺伝子として目覚め、宿主であるヒトを操ってしまうことになるのである。瀬名は、分子生物学についての知識や調査を踏まえて、『パラサイト・イヴ』では、日常の次元の夫婦や親子の営みを探りあげながら、独自の小説世界を見事に作り上げている。

四

瀬名が『パラサイト・イヴ』や「Gene」で、遺伝子を中心に据えて小説を書いたことの意義は大きい。このような分野の小説で先鞭をつけたことは、まさに画期的だったわけである。「人間を物質レベルで論理的に捉えよう」とする試みは、独自であり斬新であると言える。だが、細かな小説の技法としては、まだ熟成していない点も見受けられることは、既に見て来た通りである。もっとも、瀬名自身は、あえて大衆を意識してストーリーを展開したところもあるだろうが、本稿では、あくまで普遍につながる文学として瀬名の作品を

論じている。

現実や人生を凝視することによって、そこに描くに値するものを見つけ出し表現するのが文学であるという認識が一般的にあるだろう。ところが、現代の社会で採りあげられるのは、遺伝子のことをはじめ、オゾン層、原子力、環境ホルモンなど目に見えないものが多い。我々はそういう時代に生きることを余儀なくされているが、『パラサイト・イヴ』も、目に見えないものの恐怖というものに焦点を当てているところに独自性があるろう。もっとも、遺伝子という科学的には証明されていても、目に見えないものの実態を描き出すために、特に策略が為されているわけではなく、ミトコンドリアの遺伝子を擬人化したにすぎないようなところもある。^{註8}

人間中心の考えを相対化するためにも、ミトコンドリアを主人公として物語を展開することの意義は十分にあつたと言える。例えば、漱石の『吾輩は猫である』で、卑近な猫の目を通して人間達を風刺したのに比べると、『パラサイト・イヴ』では、体内のミトコンドリアが人間という個体を操るといふ寓話として捉えている。前者に比べると後者には、目に見えないもので、しかももしかしたら事実かもしれないという薄気味悪さがある。もっとも、『吾輩は猫である』では、人間達の滑稽さを日常に即して痛烈に描き出しており、そのような

視点は、『パラサイト・イヴ』では希薄である。『パラサイト・イヴ』に、進化の途中にある人間への批評や風刺が込められていれば、更に深みのある優れたものになっていたとも言えるだろう。

現代とは、「知」の枠組みが大きな変化を遂げようとしている時代だ、といった言葉をよく耳にする。もちろん、「知」の枠組みだけが突出して変化することはありえないわけで、その前提になっっているのは、いわゆる「近代」社会と呼ばれていたものが変容しつつあるのではないか、という認識である。確かに、現代を生きている私達にとつて、生活の在り方や価値観、さらには意識・感性などが、従来と異なったものになりつつあることは、実感として共有できるのではないだろうか。

自我の確立という近代的テーマを経て、現代人は、自己という概念そのものを疑うポストモダンな世界に投げ込まれてしまった。構造主義や現象学によって明らかにされた社会のシステムについての認識に揺さぶられているだけでなく、遺伝子など個人の内にわたる目に見えないシステムがあるのではないかという認識にも揺さぶられている。遺伝子の連続性ということを重視し、個体の死自体にそれ程の重きを置かないという考え方もあるが、『パラサイト・イヴ』には、人間の

存在感の希薄さが特に描かれているわけでもない。もともと、木下清一郎が『心は遺伝子をこえるか』の中で、「あたかも遺伝子に意志があるかのようにみるのは、人間の側からの思维的投影であり、あまりにも擬人的に遺伝子をみるのはいさぎざであろうとして、現在ではいくらか反省期にはいったかにもみえる」と述べているように、まだ、憶測の域を出ていないというのが実情である。^注

現代では、文学研究あるいは批評ということが、言語論、記号論、表現論、読者論など、さまざま側面から問い直されておき、この流動的な事態に、どのように対処してゆけばよいのか。あえて言えば、文学研究なるものが根源より揺さぶられ、問われつつあるこの事態こそ、まさに考察の対象に値するものであろう。

〈文学〉というものに何か究極的な固有な価値が内在しているというふうに思い込まれてしまうことが、言わば〈文学〉というものを崇拜してしまう陥穽である。ならば、文学そのものに対する批評には、文学言語の特殊性を具体的に明らかにしてゆく作業と並行して、にもかかわらず、文学を成立させてきた条件について根源的に検証することも不可欠となる。しかし、このことは文学研究にとつてこれまで自己を成り立たせ、その営みの意義を支えてきた基盤を問うという自

己言及的な行為でもあり、時に或る種の苦痛や不快を伴わずにはおかないはずである。

遺伝子というすべての人間、すべての生物に共通のものを採りあげていればこそ、かえって、それが文学としての普遍性を獲得するためには、作家固有の体験をくぐり抜けることが求められよう。小林秀雄が「政治と文学」の中で、文学者が個人的特殊性を超えて普遍性に達する方法として、「自己を表現するのに、自己の体験を離れることはできない。どうしたらそんな狭い道から広い道に出られるか、その明らかかな方法は誰にも、当人にもわからない。判然とわからないが、ただ力を尽くしてやってみるということが、すなわち思想を創り出す道だと信じているだけだ」と述べているようなことである。特殊な体験の裏打ちによって、主人公は作家その人の分身であるというような痛みや共有化が求められよう。もともと、遺伝子そのものを電子顕微鏡で見ることができても、実感できないところに難しさもある。それは、山折哲雄が、榊佳之との対談「分子生物学がもたらす老化と死の意味と死生観」(『驚異の小宇宙・人体Ⅲ 遺伝子・DNA』④)平11、日本放送出版協会)の中で、「私はDNAが科学的に実証されていることを理解しながら、DNAを実感することはできないんですね。ところが、何かに夢中になって、絵を見たり

小説を読んで感動しているときに、自分の体の中に何か霊的な、エネルギーのようなものを実感することがある。それは確かに実感しているのですが、科学的には必ずしも実証されない。科学的に証明されているものが実感できなくて、証明されえないものを実感しているという矛盾をいつも私は感ずるんです。この矛盾こそが、まさに人間の生命というものではないかと思っています」と述べていることにもつながる。

『パラサイト・イヴ』の場合、遺伝子の恐怖を寓話として描く分だけ、小説としての恐さは増すが、人間存在とは何かという文学が普遍的に追求する本質からは遠ざかるのである。遺伝子というものの持つ神秘性も読者を引き付ける要因かもしれないが、『パラサイト・イヴ』に内容としての新しさはあっても、いわゆる文学作品らしい文学性を備えているとは、必ずしも言えまい。しかし、遺伝子をテーマとすることで、私達はどこから来たのか、生きていくうちに何をすべきか、私達はどこへ行くのかと問うことにより、文学が新たな分野を切り拓き、違った形で蘇る可能性も示唆していると言えるのではなからうか。

注1 高辻正基の『文理シナジの発想——文科と理科の壁を越えて』(平10、丸善)には、『文理シナジ学会』というユニークな学会が、一九

九六年一〇月二六日に設立された。簡単にいえば、文系と理系の考え方を一緒に働かせ（シナジー）、双方の考え方を必要とする現代の諸問題に取り組みようというのが学会の趣旨」とある。

注2 森岡正博と石浦章一との対談「遺伝子が織り成す脳と心の世界」（NHK「人体」プロジェクト編『驚異の小宇宙・人体III 遺伝子・DNA』平11、日本放送出版協会）の中にも、「自然科学や医学、心理や哲学、宗教といった学問の知恵も必要になるし、遺伝子学を超えた全システム学とでもいうべきものが、まさに二一世紀に新たに要請される学問領域ではないか」とある。

注3 竹内久美子の『そんなバカな！ 遺伝子と神について』（平3、文藝春秋）の中にも、「私が生物学を志した理由は簡単である。少々キザな言い方だが、高校の時に知ったワトソン&クリックのDNA二重らせんモデルがあまりにも美しかったからだ」とある。このことが、『パラサイト・イブ』の利明の「生物学を志した理由」にも投影していると思われる。

注4 菅野昭正は「小説の現在——現代小説のかかえる問題」（『国文学』平8・8）の中で、「科学のひきおこした現代の新しい異相を見とどける小説的な認識の視線は、『パラサイト・イブ』にそれほど強く織りこまれていない。そこでは最後まで、恐怖の物語の面白さが先行している」と述べている。

注5 北上次郎は、『パラサイト・イブ』について「読売新聞」（平7・4・17）の書評で、「物語が激しく動きだすまでの前半が長い」と述べている。池田清彦は「人は何に恐怖を抱くか」（『週刊読書人』平7・10・20）の中で、「前半の緻密な展開と後半の荒唐無稽さの乖離がひどい」と述べており、石黒達昌は、『理科系の文学』旗揚げ宣言」（『中央公論』平8・5）の中で、「後半より前半のほうがおもしろかった」と述べている。前半と後半で差異があることについては共通しているものの、どち

らを評価するかということでは、視点により必ずしも一致していない。

注6 「全作品解説」（『月刊カドカワ』平10・1）の中の瀬名の言葉に拠る。

注7 「仕事場拜見——瀬名秀明」（『CREA』平7・11）

注8 米本昌平は「科学をよむ」（『朝日新聞』平7・10・27）の中で、『パラサイト・イブ』について、「ミトコンドリアの特殊なDNAを擬人化しただけ」と否定的に述べている。瀬名自身は、『小説と科学』（平11）の中で、「あからさまな擬人化はむしろ避けて描写していた」と述べており、作品に即した説明となっている。

注9 佐倉統は『進化論の挑戦』（平9、角川書店）の中で、「文化人類学のマーシャル・サリンスは、一九七六年『社会生物学』の翌年）に『生物学の利用と悪用』という短い本を出版して、生物学的に人類を理解する姿勢をげしく非難した。イギリスの哲学者、メアリー・ミッジリーは、ドーキンスの『利己的な遺伝子』に反発した。遺伝子には意識はないから利己的ではありえない、というのだ……。文化人類学のエドモンド・リーチのウィルソン批判はもう少しまでもだが、基本的に揶揄していることに変わりはない。人間は文化の産物であり、生物学的に理解できる範囲は限られている、というのだ」と述べている。また、河野重行は『ミトコンドリアの謎』（平11、講談社）の中で、「現実のミトコンドリアが意志をもつことはない。しかし、最近明らかにされつつあるミトコンドリア像には、確かにそう問いかけたくなるようなところがある」と述べている。